

日本古来の人魚、リュウグウノツカイの生物学

本 間 義 治 (新潟大学名誉教授)

人魚というと、ジュゴンという海牛目の哺乳類を思い浮かべる人が多いことであろう。しかし、人魚になぞらえられてきた動物は古くから各国で異なり、アザラシのような鳍脚類であったり（欧州北海沿岸）、イルカ（鯨目）（地中海）やマナテイ（海牛）（南米）であったりする。名称も、英名のmermaid（♀）、merman（♂）、ドイツ名のMeerweib、Meerfrauleinなど様々である。H. C. Andersen物語の「人魚姫」または「小さな人魚」は北方ゲルマン語系原語で“Den Lille Havfrue=Kleine Meerweib”と題されている。

ジュゴンの生息分布地は、主に太平洋・インド洋の熱帯・亜熱帯海域の沿岸で、アジモ類など海草を食し、北限は台湾から南西諸島にまで及んでいる。日南市油津湾（1907）、九州牛深の魚貫湾（2002）や朝鮮半島群山（1932）などの採捕例は、迷入と目されている。

元台北帝大教授平坂恭介（1933、1934、1942）によれば、台湾や沖縄（ザンノイオと称する）では、ジュゴンを人魚視する伝説は存在しなかったという。わが国におけるジュゴン人魚説は、T. Bromme著を訳した男爵田中芳男（1875、明治8）の『動物訓蒙 哺乳類初編：動物学初編 哺乳類上・下』の編纂刊行から急速に広まり、常識化していった。

鎌倉から江戸時代のいくつかの文書（大和本草、甲子夜話、古今著聞集、武道伝来記、諸国里人談、北国巡技記、丹州三家物語、運歩色葉集、北條五代記、和漢三歳図会、広大本草、分類本朝年代記、六物新誌など）に記されている人魚は、いずれも海岸に打ち寄ったか、海上に姿を現したもの

の目撃談であり、「薄赤い長い髪（鶏冠）と腰に蓑を持ち、体は白く…」などと、記述に共通点がみられる。この動物の正体は、台湾や中華人民共和国で“鶏冠刀魚”、“皇帶魚”など、朝鮮半島で“サンカルチー”、本邦富山湾で“花魁”^{おいらん}、越後柏崎で“シラタキ”と称するリュウグウノツカイ（*Regalecus russelli*）という異類目の紐体類に属す細長くて帯状の形態をした珍希な魚類である。因みに、近似種のサケガシラ（*Trachipterus ishikawae*）を中国では“粗鱗魚”とか“扇尾魚”と呼ぶ。英語でoarfish、ribbonfish、ドイツ語でRiemenfischと呼ばれるリュウグウノツカイこそ人魚になぞらえられた動物であることを、最初に指摘したのは、九大名誉教授であった内田恵太郎（1960、1962）である。児童文学作家の小川未明（文化功労者）の作品『赤い蠟燭と人魚』（1921）の元になった越後大潟町雁子浜にある比翼塚伝説（北方文学、2号）の人魚も、描写からリュウグウノツカイと推定される。したがって、八百比丘尼入定の地と伝説されている越前小浜の海岸に建立された上半身が少女、下半身が鱗で覆われた1対の魚形人魚像の説明板に、「人魚はジュゴン…」と記してあるのは、矛盾も甚だしい。

この全長10mにも達する奇態な希魚は、中部太平洋の深海中層に生活の場をもち、蛇行遊泳のほか、タチウオのように垂直位に体を保つことが知られ、浮遊卵を産むと推測されている。そして、荒天の後、ことに日本海沿岸へ厳冬期～初春に漂着することが多い。したがって、天変地異なかでもしばしば地震と結びつけられ報道されてきたが（末広、1969；青森県水産試験場、1984、など）、

憶測に過ぎない。また、自身の水分が多い柔らかい肉質で、不味であるにもかかわらず、本邦各地で薬効視して、多数の八百比丘尼伝説が生まれたが、越後にも佐渡にもある。神奈川大学教授宮田 登(1999)が、ジュゴンの肉を食した女性を八百比丘尼と称したと説いているのは、当たらない。なお、サンカルチャーの肉はライ病に特效があると信じられ、高価に取引されたという。江戸末期の庄内藩家老松森胤保もその一人である。傑出したナチュラリストで、大著『両羽博物図譜』(59冊、稿本)(1882~1892)を執筆したほか、『物理新論』(稿本)(1885)の中で、独自の分類進化体系を打ち立てている。彼が実物をスケッチした(1856、安政3)と称する人魚は、実はサルの頭胸部にズキ型魚類の胴部を継いだものであり、同様の代

物は江戸末期から明治初期にかけて、西欧人の土産物としてかなりの数がつくられたという。ライデン博物館にも所蔵されているが、越後柏崎の妙智寺にも1体あり、これはサケの胴部を継いだものである。やはり江戸末期の幕臣で、著名な画家であった毛利梅園(1798~1851、寛政10~嘉永4)の『梅園魚譜』にも、彩色図2葉が載せられている。中国広東州では、コイ科魚類、ニベ、オオウナギなどを巧みにつなぎ合わせ、作成された。

著者は、ごく希に漂着したり捕獲されたりしたりリュウグウノツカイや近似種のサケガシラ、アカナマダ(墨汁嚢をもつ珍魚)などの生殖腺や他の器官組織を、顕微鏡によって観察を続けてきたので、それらの結果より本種の生活環を考究したい。

COMMENT

本間報告では、日本古来の人魚説話のモデル動物が何かについて、諸説(通説)が検証され、それが「リュウグウノツカイ」であることが確められ、加えて、この魚の生物学の特徴が明らかにされた。

本報告で強調されたことは、「わが国における人魚ジュゴン説」は看過できない「俗論」であるということである。このことは、古文書(実見談記録)、現存剥製等の調査により実証的に明らかにされた。そして、日本にはジュゴンの人魚視する説話は存在しなかったことを確めた。通説の根源は1875年(明治8)刊行のT. Bromme著田中芳男訳『動物学(哺乳類)上・下』であったのである。

さらに、古文書の記述内容を分析し、その正体

大海原 宏(福井県立大学)

が「リュウグウノツカイ」であること、同種の魚類を含めて、日本海沿岸各地でこの魚に固有の名称が付けられていること等も明らかにされた。報告者はこの魚にまつわる諸々の推論の実証性に欠けることにも言及している。

第2の論点、「リュウグウノツカイの生物学」は報告者の専門領域である。ここでは、生息域、形態、遊泳、産卵のほか、生体の組織学的研究成果の一端が近縁種との比較を交えて簡潔に報告された。

本報告は、日本の民俗の伝承である古来からの人魚説話が正しい理解のもとに継承されることの大切さを明示したこと、希少生物種である深海魚の生物学の研究の現代的課題にも注視したこと等貴重なものであった。